

昭和の偉人の波瀾万丈の生き方が

自身の人生と重なる、繋がる、甦る！

昭和偉人伝

『昭和』国家壊滅の状態から未曾有の成長を遂げた類まれな時代。そこには、時代を牽引したリーダーがいました。輝くリーダーですが順風満帆ではありません。独自取材と貴重な映像、いまだからこそ言葉にできる真実のインタビューを交えて綴る波瀾万丈の偉人伝です。『昭和』という時代がいまなお輝いて見えるのか、私たちの心に深く刺さるのか、偉人の後ろ姿から私たち自身を振り返ります。

BS 朝日 11月30日(水)21:00～21:54 放送

21世紀の日本をグランドデザインした男 ～賀川豊彦～

1939年(昭和14年)アメリカで出版された「Three Trumpets Sound」という本で、ガンジー、シュバイツァーと並び20世紀の三大聖人と称された日本人がいました。その人の名は賀川豊彦。

神戸の貧しい暮らしの人々を助け、弱者の救済に取り組んだ彼は、かつて“スラムの聖人”とも呼ばれました。その一方で彼は、大正時代に空前絶後の400万部を超えるベストセラーの小説を書く文学者でもあったのです。

その自伝的小説「死線を越えて」では、自身の前半生を重ね合わせた主人公が弱者を救い、虐げられていた労働者のために労働争議に貢献する様が力強く描かれていました。またこの小説は当時の日本が抱える社会問題を浮き彫りにする記録的な側面をも持ち合わせ、歴史的に意義のある作品でもあったのです。

日本人で初めてノーベル文学賞と平和賞の候補になったのも、実は賀川豊彦でした。この作品を読んだ、後のノーベル賞作家・大江健三郎をして「なんて、面白い小説なのか…。あんなにも多くの読者の心をつかむ作品を書くことは、とても自分にはできない」と言わしめた男、賀川豊彦。

そして賀川豊彦は、大正から昭和にかけて社会運動家として弱者救済を訴え、「労働組合」、「生協」、「農協」など、現在にまで続く日本の共助の基礎を創り上げた人物でもあります。

まさに、21世紀の日本をグランドデザインした男と言われる所以です。

そんな賀川豊彦について、現在の私たちが知る機会はこれまで多くはありませんでした。それは一体何故なのでしょう。

終戦によって大きく変容した社会体制と価値観が、その後迎える高度経済成長の流れの中で多くのものを産み出す反面、棄て去ってしまった何か……。その何かにつながるものが、賀川豊彦の人生に見えてくるならば、学ぶべき世界がそこにあるのではないのでしょうか。